

地域情報（県別）

がん相談支援センターは患者の思いを聞き分けることが大事－大分医療センターの医療ソーシャルワーカー・村上英恵さん、がん性疼痛看護認定看護師の廣田紘子さんに聞く◆Vol.2

2019年6月5日（水）配信 m3.com地域版

独立行政法人国立病院機構大分医療センターでは、がん相談支援センターの職員が中心となって、がんに関わるエピソードをつづる「がん川柳」を毎年募集し冊子にして発行している。その活動はNHKのドキュメンタリー番組にも取り上げられ、ユニークな活動として全国的にも注目を集めている。がん相談支援センターの業務を兼任する医療ソーシャルワーカーの村上英恵さんとがん性疼痛看護認定看護師の廣田紘子さんに、大分医療センターの地域での位置付け、がん相談支援センターの役割、相談時に注意していること、がん患者支援への思い、がん相談支援センターとしての今後の目標や課題などについて話を伺った。（2019年1月23日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)

——大分医療センターはどのような病院ですか。

村上 大分市東部地区に位置する2次救急病院で、同地区の他に臼杵市や津久見市などの県南からの紹介、救急搬送も多くあります。当地域の中核病院（300床）として特にがん診療に強みを持っています。また、地域の医師会、救急隊との連携を特に強化しており、地域に密着した病院であると思います。

——がん相談支援センターはどのような役割を担っているのですか。

廣田 全国のがん診療連携拠点病院とがん診療連携協力病院は、患者やご家族が無料で相談を受けることができる「がん相談支援センター」を設置しています。当院も、がん診療連携協力病院の一つとしてがん相談支援センターを設置し運営しています。

村上 治療に関する相談は廣田などの認定看護師が対応し、経済的な面や生活、介護に関する相談はソーシャルワーカーが対応します。その他、相談内容によっては薬剤師や栄養士などにも入ってもらったりもします。



がん相談支援センターの業務を兼任する村上さん（左）と廣田さん（右）

——がん相談支援センターを利用される方はどのくらいいますか。

村上 がん相談支援センターに来なくても、入院中の方だと病棟から緩和ケアチームに相談しますし、退院や生活に関する相談は私などソーシャルワーカーに相談できる体制になっています。

廣田 当院の場合、外来や病棟の医師や看護師と連携して看護師やソーシャルワーカーが患者さんの相談に直接対応することも多いので、がん相談支援センターに来られるのは週に数件程度です。診断の初期の方もいますし、治療中、緩和ケア中の方もいます。対面の時もあれば電話の時もあります。

——がん患者さんの相談を受けている時に気を付けていることは何ですか。

廣田 患者さんの話をよく聞いて、その方が最終的に何を求めているのかを理解することが一番大事ですね。例えばお話しただけで自身の中で整理されて終わる方もいますし、情報を欲しいという方もいます。そこはしっかりと聞き分けるように心がけています。それと、対面と違って電話の場合は患者さんの顔が見えません。耳と心を研ぎ澄ませて対応しないと行き違いが発生してしまうので、そこだけは無いように注意しています。そして、「決してこれで終わりではないのでまた気になったら来てくださいね！」と最後に一言添えています。次に相談に来られるかどうかは患者さん次第なのですが、関係が途切れないように注意しています。

——「がん性疼痛看護認定看護師」の資格を取られたんですね。

廣田 私は新人の時から当院に勤めているのですが、がんの患者さんが多い病棟で勤務してきて、苦しむ患者さんを目の前にして何もできない自分が歯がゆくて。そんな時に上司からお話を頂き、自分の知見がより広がるのであればということで勉強に行かせてもらって「がん性疼痛看護認定看護師」の資格を取らせていただきました。現在は緩和ケアチームの看護師としても活動しています。がんの患者さんは痛みがあるとご飯が食べられなかったり眠れなかったりして生活の質がどんどん低下していきます。そうした患者さんの痛みを緩和するために、担当医師、看護師、薬剤師と相談しながら適切な治療、ケアについて検討、実践しています。また、スタッフの相談を受けたり、教育を企画しながら緩和ケアの向上にも努めています。これから毎日患者さんと接する中でさらに専門性を深めていきたいと思っています。

——がん患者さんと日々接するのはかなり大変ではないでしょうか。

廣田 大変さももちろんありますが、患者さんやご家族から教えていただくものがたくさんあります。一人一人の人生を共にさせてもらえる仕事はなかなかないのではないかなと思います。すごく貴重な経験をさせていただき、やりがいを感じています。そして、当院はチーム医療で、垣根が低い組織でもあるので一人で抱え込むということはなく、いろいろと助けていただいています。

——今後の目標や課題についてお聞かせください

村上 2人とも兼任であるため、他の患者さんの対応をしながらがん相談支援センターに来られた方にすぐに対応できないことが時にはあります。せっかく相談に来て下さった方に不安な気持ちを与えることの無いよう、院内で相談して対応方法を検討していく予定です。それと、がん相談支援センターの存在をもっと知ってもらうために院内での広報活動や分かりやすい表示が必要かなと思っています。

廣田 がん川柳だけでなく、がんサロンを開催していくのも私達の役割の一つです。がんサロンは患者さんが気軽に集える場ですので、より充実したものにして、その存在をしっかりとお伝えして有効に活用していただきたいと思っています。

取材・文・撮影＝堀 勝雄